

研究成果概要書（ホームページ掲載用）

テーマ「北海道のダム湖周辺におけるオジロワシの営巣状況と営巣を可能にする環境条件の解明」

所 属 東京農業大学生物産業学部

氏 名 白木 彩子

目的

猛禽類などの高次捕食者が生息可能な環境を備えたダム湖は、生物多様性保全の上でも重要である。オジロワシは主食である魚類や水禽類が豊富に生息する海岸や湖沼、河川周辺の大木に営巣するが、好適な条件下にある営巣環境は十分とは言えない状況にある。本研究では北海道オホーツク地域のダム湖でオジロワシの営巣の有無を確認し、営巣可能なダム湖および周辺の森林や河川の環境特性を明らかにすることを目的とした。

方法

北海道オホーツク振興局管内にある8つのダム湖を対象とし、2025年2～9月に定点観察によるオジロワシの生息状況調査を行ったほか、2026年3月中旬に補足調査を実施した。これらの調査では、カモ類の個体数や目視観測によるダム湖面や周辺河川の結氷状況も記録した。成鳥の生息が確認されたダム湖では、狩り場や営巣木を特定するために半日～終日のオジロワシの行動観察を行った。以上の結果を用い、オホーツク地域外で過去に営巣を確認したダム湖を含めた営巣有りのダム湖と、営巣の無いダム湖間でダムの概要や周辺の森林面積、ダム湖面および周辺河川の結氷状況、カモ類の個体数などを比較した。

成果

オホーツク地域のダム湖のうち3ヶ所で営巣が確実であったほか、営巣可能性の高い、可能性のあるダム湖がそれぞれ1ヶ所ずつあり、既に多くのオジロワシがダム湖周辺を営巣地として利用していると考えられた。営巣の有無にはダム竣工からの経過年数（営巣有：平均6.2年、営巣無：平均22年、 $p < 0.05$ ）と、カモ類の生息数が関係する可能性が示唆された。一方、ダム湖周辺の森林面積やダム湖および周辺河川の結氷状態と、営巣有無との関係は明らかではなかった。オジロワシによるダム湖面での狩りはカモ類と魚類を対象として計7回観察され、つがいにより凡そ同じ場所が利用される傾向がみられた。

今後の展望

営巣要件解明の新たな切り口として、今回示唆された営巣の有無とダム建設後の経過年数との関係に着目し、ダム湖の環境や餌生物の経年変化がオジロワシの営巣とどのように関連し得るのかを明らかにすることは興味深い。魚類の専門家などを含めた、ダム湖の生態系に係る共同研究としての展開を検討したい。一方、オジロワシの営巣や採餌場の環境要素として、今回調査対象としたダム湖周辺の森林や河川の構造、狩り場地点の特徴などの分析は未実施であることから、解析を進めたい。ただし、解析の精度を高めるためにオホーツク地域以外のダム湖でも営巣確認調査を行い、例数を補強することが今後必要と考えられる。